



九州沖縄農業研究センター ニュース

No.11

平成16年12月



研究成果の紹介(西合志)



講演会(都城)

実演(筑後)



体験(筑後)



試食(久留米)



圃場見学(筑後)

「九州沖縄農業研究センター一般公開2004」を開催しました。最近の研究成果の紹介を始め、講演会、試食、体験、圃場見学など多彩な催しで、4,000人を超える参加者があり、好評を得ました。
(写真提供：情報資料課)

● 主な記事 ●

- 新任部長の紹介
- 研究成果の紹介
 - ・水稲・かんしょ・大豆・さとうきび・えん麦の新しい7品種が誕生
 - ・元気タップリ、ゴーヤです!
 - ・カンキツグリーンング病原体の迅速簡易検出法の開発
- 九州沖縄農研の動き
 - ・国際シンポジウム「環境保全型農業推進のため

- の微生物資源の探索と利用
- ・所長キャラバン活動の紹介
- ・大好評!九州沖縄農業研究センター一般公開
- ・第2回「研究協力員の集い」を開催
- 国際研究情報
 - 国際イチゴ研究の最前線
- フォトコーナー
- 表彰、お知らせ

新任部長の紹介

総務部長 屋代文夫

ポジティブな職場の醸成

独立行政法人移行後4年目という重大な節目にさしかかった平成16年4月、新米総務部長として当センターに赴任して参りました。

研究支援・管理部門である総務部の業務は基本的には他の研究所と変わりませんが、職場環境はそれぞれに異なるところであり、仕事に対する意識の持ち方も違ってきます。独立行政法人移行後、効率化・合理化等で厳しさを増しネガティブになりがちですが、こういう時だからこそ、ポジティブな活気ある職場の醸成に努めて参りたいと思っております。



(略歴)

- 昭和41年3月 農林省入省
- 平成4年4月 技術会議事務局総務課監査官
- 平成7年4月 技術会議事務局筑波事務所総務課課長補佐
- 平成9年4月 技術会議事務局地域振興課課長補佐
- 平成13年4月 中央農業総合研究センター総務部総務課長
- 平成14年4月 機構統括部会計監査室長
- 平成16年4月 九州沖縄農業研究センター総務部長

水田作研究部長 堀末 登

(抱負)

九州・沖縄地域の水田作では夏期の高温害、雨害や台風害、病虫害の発生が他地域に比べて多いというリスクを抱えています。一方、冬季は温暖で有利な条件にあります。今後は、地域間競争、担い手の減少・高齢化、農業の国際化等に対応して、さらなる省力・低コスト・高品質化及び高付加価値化を追求していきます。

また、「安全・安心の農産物」の生産・提供のため、地域の実情を踏まえた「資源循環・環境保全型」及び「ふるさとに潤いと活性を与える」水田作農業の発展を目指します。

当地域の農業の背景と方向に鑑み、当該研究部を外から見て存在感のある研究部としていきたいです。



(略歴)

- 東北農試、農研センター、青森県農試藤坂支場等で水稲の育種研究に従事。熱研センターでは中国雲南省に派遣され、日中共同の水稲育種研究に参加。「新形質米品種」の成果の普及。東北における水稲直播栽培、飼料稲栽培の普及に努力。前任地は東北農研センター水田利用部。九州佐賀県出身。

野菜花き研究部長 望月龍也

(抱負)

野菜・花き園芸は九州沖縄農業の重要な柱であり、全国的にも冬春期を中心とした供給基地として大きな位置を占めています。このような地域の野菜・花き園芸のさらなる発展に貢献するため、所内はもとより地域や全国の公立機関・民間企業・大学等との連携・協力をこれまで以上に強化し、野菜花き研究部が地域から信頼され、その役割を果たしていけるよう努めます。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



(略歴)

昭和27年8月生、昭和50年農林省入省、野菜試験場、農林水産技術会議事務局、野菜・茶業試験場を経て平成12年九州農業試験場企画連絡室、農業技術研究機構九州沖縄農業研究センター企画調整部研究調整官から平成16年4月に現職、専門は野菜育種(主としてトマト・イチゴの品質育種)

作物機能開発部長 杉本 明

ゆめを形にする仕事

一見えない世界から見える世界、
そして見えない世界へー

自分のデザインを物や技術に仕上げて農家や食品加工業の方に手渡す作物機能開発部の仕事は、肉眼では見えない世界、遺伝子に触れることに始まり、目に見える世界、水田や畑の作物、野菜や花きの改良につないで、作物や食品の、目には見えない健康に良い特性(機能性)を育てることに終わります。作物機能開発部は部自身でも、ダイズ、さとうきび、ソバ、ハトムギの品種改良を行っています。ミクロの探索と、作物・食品の開発を同時に進める「夢のような」毎日です。私は今年6月に種子島のさとうきび育種研究室から転勤してきました。「自分自身の夢」を「人々に渡すことのできる正夢に」育てようと努めています。よろしくお願いいたします。



(略歴)

昭和61年4月に沖縄県農業試験場作物部さとうきび育種研究室から熱帯農業センター沖縄支所作作物育種研究室に異動。熱帯農業研究センター企画連絡室(在筑波)を経て、平成4年10月から九州農業試験場作物開発部さとうきび育種研究室長。平成16年6月から現職。

研究成果

水稲・かんしょ・大豆・さとうきび・えん麦の新しい7品種が誕生 —平成16年度第1回農林水産省農作物命名登録品種—

子実もわらも多収、稲発酵粗飼料向きの「ニシアオバ」(水稲農林399号)

<新品種の特徴>

- 1) 出穂期は「ニシホマレ」より2日程度早く、九州地域では“中生の晩”に属します。
- 2) 「ニシホマレ」に比べ、稈長は10cm程度長く、子実とワラを合わせた全重は「ニシホマレ」よりも15%多収です。
- 3) 脱粒しにくいいため、飼料用の収穫機でも収穫ロスが少ないです。
- 4) 米一粒の重さが一般の主食用品種の1.5倍程度あり大粒です。
- 5) ホールクロップサイレージの発酵品質はロールベラ、サイロ等いずれの調製法をとっても良好で、牛の嗜好性も比較的良好です。



左:「ニシアオバ」、右:「ニシホマレ」

(水田作研究部稲育種研究室 電話0942-52-0647)

倒れにくく直播に適し、おいしい「ふくいずみ」(水稲農林400号)

<新品種の特徴>

- 1) 「ヒノヒカリ」に比べ、出穂期、成熟期ともに早く、麦作跡で晩播となる場合でも安定して栽培できます。
- 2) 直播、移植いずれにおいても倒伏に強い特性があります。

3) 「日本晴」「ヒノヒカリ」よりいもち病に強く「やや強」です。

4) カルパーコーティング種子を用いた苗立ち試験では、「ヒノヒカリ」より早く苗立ちが揃う特性があります。

5) 直播での収量は普通期栽培、晩播栽培とも「日本晴」「ヒノヒカリ」よりも多収です。

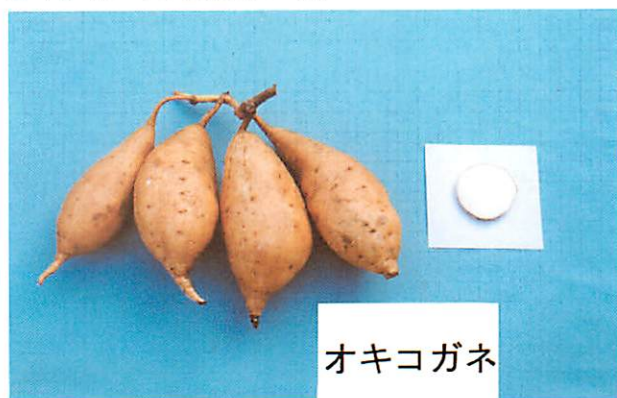
6) 米の外観品質は「日本晴」「ヒノヒカリ」並かやや優れ、ご飯の味も「ヒノヒカリ」並に良好です。



左:「ふくいずみ」、中央:「日本晴」、右:「ヒノヒカリ」

(水田作研究部稲育種研究室 電話0942-52-0647)

バレイシヨのような料理ができる新規食材「オキコガネ」(かんしょ農林61号)



地下部

＜新品種の特徴＞

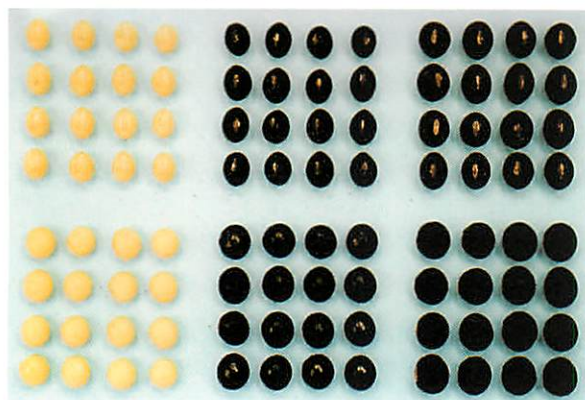
- 1) 加熱調理しても麦芽糖が増えないので甘味が少なく、コロッケやサラダなどの料理に利用できます。
- 2) いもの皮色は淡黄褐、形状は短紡錘形で、外観は良好で、貯蔵しやすい品種です。
- 3) サツマイモネコブセンチュウや黒斑病抵抗性は中～やや強です。

(畑作研究部サツマイモ育種研究室
電話0986-24-4274)

煮豆に適した暖地向き黒大豆「クロダマル」(だいで農林128号)

＜新品種の特徴＞

- 1) 暖地向きの黒大豆品種でアントシアニン含有量が高いです。
- 2) 粒は丹波黒系大豆と異なりやや光沢があります。
- 3) 粒形は扁球で「新丹波黒」よりやや小さいです。
- 4) 煮豆の製品歩留まりが高く、外観も良好で食感はやや弾力性があります。
- 5) 成熟期は「新丹波黒」と同じ極晩生で、収量性は「新丹波黒」並かやや多収です。
- 6) 「新丹波黒」より倒伏抵抗性がやや強く、裂莢しにくいです。



左:「フクユタカ」、中央「クロダマル」、右:「新丹波黒」
(作物機能開発部大豆育種研究室
電話096-242-7740)

初期伸長に優れ株出安定多収「NiTn 18」(さとうきび農林18号)

＜新品種の特徴＞

- 1) 初期伸長が良好で茎が長く、茎数が多いです。
- 2) 「NiF 8」よりも可製糖率は低いですが、茎収量が高いため可製糖量は多いです。
- 3) 低温下での萌芽性に優れ、無マルチでの株出栽培でも、「NiF 8」よりも多収となります。
- 4) 黒穂病抵抗性は「極弱」なので、栽培には注意が必要です。
- 5) 「NiF 8」の収量が低い圃場で多収が期待できます。

黒穂病に強く株出多収「NiTn 19」(さとうきび農林19号)

＜新品種の特徴＞

- 1) 分けつが旺盛で、茎数が安定して多いです。
- 2) 普及品種と比較して春植、株出、夏植共に安定して茎収量が高く、可製糖量は多いです。
- 3) 発芽性が優れ、欠株が少ないです。
- 4) 黒穂病に対する抵抗性が「極強」です。



左から「NCo 310」、「NiF 8」、「NiTn 19」、「Ni 9」
(作物機能開発部さとうきび育種研究室
電話0997-25-0100)

耐倒伏性が極めて優れる夏播用極早生「たちあかね」(えん麦農林11号)

＜新品種の特徴＞

- 1) 耐倒伏性は既存品種の中で最も強く、倒伏による収穫ロスや品質低下等の危険性が小さいため、省力的に安心して栽培することができます。
- 2) 夏播栽培において重要な冠さび病を始めとする諸病害に強く、飼料品質を高く維持できます。
- 3) 収量性と耐倒伏性等から判断して、特に南九州において能力を発揮し、高品質な飼料を省力的かつ計画的に生産することが要求される委託栽培等に適すると考えます。



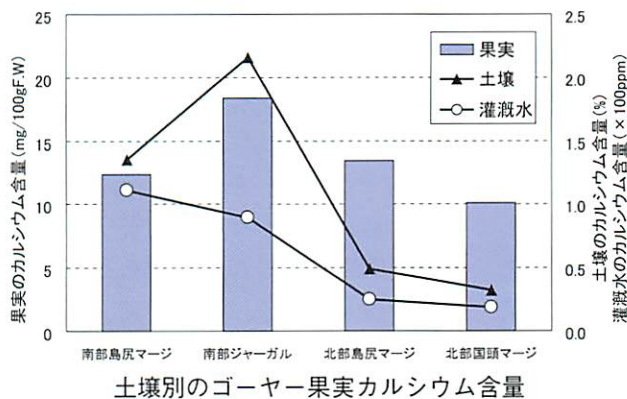
出穂期の「たちあかね」(2004年11月9日西合志)
(畜産飼料作研究部牧草育種研究室
電話096-242-7754)

研究成果

元気タップリ、ゴーヤーです！

ゴーヤーという名前は、沖縄の方言でニガウリのことを指します。夏野菜といわれるゴーヤーに含まれるビタミンCは、太陽の恵みをしっかりと受けた賜物です。加えて沖縄で育ったゴーヤーは、土壌に含まれるカルシウムを吸収して育っています。土、水、光をタップリ受けたゴーヤーは、まさに沖縄野菜の代表選手です。今回、沖縄野菜の持つ特徴に迫るべくゴーヤーのミネラル成分について調査を行いました。その一部を紹介します。

沖縄には、国頭マージ、鳥尻マージ、ジャーガルと呼ばれる土壌があります。これら土壌で栽培されたゴーヤー果肉のカルシウム含量を測定したところ、土壌別に違いがあることがわかりました。ジャーガル土壌で栽培されたゴーヤーには、18.4mg/100gと最も高いカルシウム含量が認められました。これは、土壌中および灌漑水中の高いカルシウム含量を反映したものです。また、国頭マージ土壌で栽培さ



れたゴーヤーでも、福岡県久留米市（九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部）で栽培された果実に比べると高い傾向にありました。

（元職員 比屋根理恵、沖縄農業研究官 宮重俊一
電話0980-54-9733）

研究成果

カンキツグリーニング病原体の迅速簡易検出法の開発

カンキツグリーニング病はミカンキジラミ（図1）が伝搬するカンキツ類の病害で、感染樹は葉が黄化し（図2）、やがて木全体が枯死する大変被害の大きい病害です。東南アジアでは、多くのカンキツ産地がこの病気で壊滅しました。日本では南西諸島の一部に発生し、発生域の拡大が心配されています。



図1. カンキツグリーニング病媒介虫 ミカンキジラミ（矢印）



図2. カンキツグリーニング病罹病樹に見られる葉の黄化症状

一方、病原体は感染樹の通導組織に見られ、栄養の移動を阻害して樹を衰弱させると考えられています。病原体は特殊な細菌で、培養ができないこともあって検出することは非常に困難でした。近年、病原体の遺伝子を増幅させて検出するさまざまな方法が試みられましたが、いずれも高額な機器が必要でした。

そこで、最近発明されたランプ法という新しい遺伝子増幅法を応用して、この病原体の検出法を開発しました。この方法では、特殊な酵素と鍵型構造を持つ人工核酸（プライマー）と検査する組織からの抽出液とを混合し、65℃で30分の加熱処理をします。病原体遺伝子があれば液が白濁することから、肉眼でも判定できます。必要な機械は数万円で購入できる恒温器だけです。当研究室ではさらに改良を加え、増幅した目的遺伝子をナイロン膜に滴下し、染色剤（アズールB）で染めて検出する方法も併せて開発しました（図3）。これらの方法を使えば、高度な実験設備を持たなくても、普及センター、指導所などでもカンキツグリーニング病の検出が迅速かつ簡易に行えると期待されます。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 H N

図3. ランプ法によるカンキツ樹からの病原体遺伝子の検出例（1～12は鹿児島、沖縄で採集した罹病カンキツで青いスポットが観察される。HとNは健全カンキツ（陰性））。

（地域基盤研究部病害遺伝子制御研究室
岩波徹 電話096-242-7730）

九州沖縄農研の動き

国際シンポジウム

「環境保全型農業推進のための微生物資源の探索と利用」

2004年7月28日、九州沖縄農業研究センター主催、大韓民国Mokwon大学校共催、九州東海大学協賛により、国際シンポジウム「環境保全型農業推進のための微生物資源の探索と利用」を当所大会議室において開催しました。当日は、有機農業等安全と安心をめざした新しい農業生産技術に関心のある方、微生物生態研究に携わる大学、独法研究機関、民間企業の研究者等国内外から予想を上回る約150名の方々に参加いただきました。

特定微生物種あるいは微生物群の特異的検出と定量、土壌生態系における機能発現評価等の新しい手法を利用した研究成果とその農業技術への利用の可能性について論議することを目的とし、8名の方に話題提供いただきました。まず、名古屋大学木村真人教授から、「農業現場における微生物資源の検索と利用」と題して、分子生態学を利用した最先端の微生物検出技法等の紹介と農耕地土壌生態系への応用に関して基調講演をしていただきました。会場からは、農業現場への利用に向けた手法の改良と簡便化への期待の聲が上がりました。

また、Mokwon大学校微生物生態資源研究所Whang Kyung-Sook所長による「下層土から分離した低栄養性脱窒菌の生物学的多様性の評価」、あるいは片倉チカリン筑波総合研究所野口勝憲所長による「微生物資材開発の現状と課題」等の一般招待講演に対しても、現状と将来展望に関する活発な意見交換がなされました。

これら以外にも、「韓国農業微生物資源の現状と展望 (Kwon Soon-Wo韓国農業微生物保存センター細

菌部門責任者)」、「微生物生態学におけるマイクロアレイ法の利用 (Cho Jae-Chang韓国外国語大学助教授)」、「遺伝子類縁性検索システムの開発と利用 (渡邊克二九州沖縄農研主任研究官)」、「FISH法を利用した堆肥及び農耕地の生物的安全性評価 (染谷孝佐賀大学助教授)」、「サツマイモの茎に生息する内生窒素固定細菌の同定と作物栄養のために内生微生物を利用するアプローチ (安達克樹九州沖縄農研研究室長)」等の話題提供と意見交換が行われました。

このシンポジウムでは、環境保全型農業を推進するために必要な研究成果についてのポスターセッションも行いました。微生物生態研究に限らず、土壌肥料、植物病理、農業気象あるいは農業土木等全55課題に及ぶ多様な成果が展示されたポスターセッション会場では、発表者と参加者による活発な意見交換が見られました。

講演要旨及びポスター要旨はプロシーディングとして取りまとめ、参加者及び関係機関に配布いたしました。また、当日の様子は当所ホームページに掲載しております。

(国際シンポジウム実行委員会事務局)



講演会場

ポスター会場



国際シンポジウム参加者の皆さん

九州沖縄農研の動き

所長キャラバン活動の紹介

—現地を回って農業関係者との意見交換—

九州沖縄農業研究センターでは、今年の夏から、山川所長と企画調整部で「キャラバン隊」を編成し、当研究所で開発された技術の普及現場を訪ね、現地の関係者と意見交換するという取り組みを始めました。

キャラバンの目的

開発された技術は、その内容が単に報告書に記載されているだけではあまり意味がありません。実際に現場で使われてみて新しい技術の価値や研究レベルでは分からなかった問題点がみえてきます。そこで、キャラバン隊を組んで、①現地関係者との意見交換による技術のフォローアップ、②現場における新たな技術ニーズの探索、③九州沖縄農業研究センターの研究成果のPRを行うことにしました。

キャラバンの実際

キャラバンでは、現地の農業関係者と一緒に生産現場などを訪ね、新品種や新しい技術の普及状況を視察します。この後、近くの公民館や役場で意見交換会を設け、新品種の栽培法や加工・利用法、新技術等について助言や指導を行います。意見交換会の会場には液晶プロジェクターを持ち込んで、所全体の活動状況や成果についてPRします。

このように、生産者や実需者、行政担当者等と所の幹部が直接、接することによって、現場からは「九州沖縄農業研究センターが身近に感じられるようになった」との声が寄せられるようになりました。新しい技術に期待を抱く生産者たちの生き生きとした顔を見ると、技術開発を行う私たちにも力がみな



熊本県合志町におけるキャラバンの風景
(サツマイモ育成品種の栽培状況)

ぎって来るようです。

猛暑の8月に始まったキャラバンも、12月に行われた沖縄イチゴキャラバンですでに9回を数えました。

キャラバンの波及効果

キャラバンがきっかけとなって、現場からの問い合わせや要望がたびたび寄せられるようになりました。「技術の普及」に向けた生産者や加工業者等との連携は着実に深まっています。また所で開発された新技術の普及状況を目の当たりにし、私たち企画サイドの人間も、一層の自信を持って成果をPRできるようになりました。

(企画調整部連絡調整室長 岡本正弘
電話096-242-7684)

これまでの主なキャラバン活動

キャラバンの内容	開催月日	場 所	概 要
サツマイモ現地指導	8月5日	熊本県合志町	サツマイモによる町おこしのために結成された農業法人「山渡会」にサツマイモ育成品種の栽培・加工・利用法等を指導
水稲直播栽培視察 大豆栽培圃場視察	8月6日	佐賀県上峰町	上峰町のショットガン直播による水稲直播栽培や大豆栽培圃場を視察。上峰町役場で現地担当者や水田作研究部職員等と意見交換
飼料イネ現地視察	11月10日	熊本県御船町	御船町で飼料イネの収穫、ロール作業を視察し、飼料イネ新品種等を紹介。その後、畜産飼料作研究部職員と意見交換。
成分調整成型堆肥の 利用状況の視察	11月17日	熊本県大津町 旭志村・七城町	大津町（ニンジン）、旭志村（ネギ）、七城町（アスパラガス）でベレット堆肥を利用した野菜栽培圃場を視察。JA菊池でベレット堆肥の利用法等について意見交換。その後、環境資源研究部職員と意見交換。
暖地畑輪作体系の 視察	12月9日 ～10日	宮崎県都城市	農業生産法人でサツマイモやゴボウの集荷作業を見学後、現地でゴボウの機械収穫作業やラッキョウの栽培圃場を視察。畑作研究部の現地圃場で暖地畑輪作体系を視察。二日目は畑作研究部職員と意見交換し、場内試験圃場を見学。
沖縄イチゴ栽培導入	12月17日	沖縄県宜野座村 中城村	農業後継者等育成センター（宜野座）、民間食品会社（中城）でイチゴ（「サチノカ」）の施設栽培を見学。栽培法や苗増殖法等について指導。

九州沖縄農研の動き

大好評！九州沖縄農業研究センター一般公開 西合志・筑後・都城地区ルポ

【西合志地区・本部】

平成16年11月6日(土)に、『ささえます「地域の暮らし」～農業研究最前線～』をメインテーマに一般公開を開催しました。当日は汗ばむほどの好天に恵まれ、1,670名の来場者で賑わいました。総合展示では、今年が目玉を「地域総合研究」と「国際コメ年」とし、「地域総合研究」のコーナーには、成分調整ペレット堆肥と稲麦大豆の直播技術体系、沖縄県初のイチゴ産地づくりの3成果を展示しました。また、「国際コメ年」にちなんで世界の稲作の写真や品種を展示するとともに、「公開講演～身近なお米の話～」と題して、コメの品種、飼料用イネ、地域水田農業ビジョンについての3講演が行われ、熱心な討議が交わされました。この他、当センター育成小麦チクゴイズミのうどんや、青臭みのない大豆エルスターを用いた豆乳、乳製品、肉加工品等の「試食コーナー」、「いも掘り体験」、「台風体験」も親子連れなどで賑わいを見せました。また、「展示即売コーナー」には、当センターの「研究協力員」の中から、菊南温泉観光ホテル、くまもと農業女性ネットワーク、合志町農業法人山渡会の参加も得られ、当センターのPRに一役買っていただきました。



研究成果の紹介コーナー

【筑後地区・水田作研究部】

筑後地区の一般公開は10月30日(土)に開催されました。当日は天候にも恵まれ、500名を越える来場者を得て、とても賑やかな一日となりました。今回の目玉は何と言っても‘実演’です。豆腐作りやパン焼き実演に、普段とは違った一面を見せる研究員にお客さんも魅了され、大満足のようでした。

いつものがらの‘試食’、‘即売’、‘講演’もさることながら、今回初めて取り組んだ‘化学実験コーナー’は大盛況でした。試験管を見つめた子供たち

の瞳の輝きと歓声が、とても印象的な催しでした。研究成果をより身近に、そして地域とのつながりをさらに強くする新たな試みを、これからも続けていきたいと思えます。



化学実験の実演

とうふ作りの実演

【都城地区・畑作研究部】

都城地区一般公開は平成16年11月13日(土)に開催しました。当日は朝から好天に恵まれ、1,361名の方にお越しいただきました。

アンケートの結果、来所者の内訳は、都城市内80%、男女比38:62、60歳以上48%、また、開催を知ったのは新聞折込チラシが50%となっています。催しものでは、研究成果紹介の他、イモ掘り、試食・試飲に人気は集中し、研究成果紹介ではイモの様々な種類、効能、用途等に興味を示す感想が目立ちました。

その他には「サツマイモは長寿食」と題した講演会、野菜苗移植等作業機の実演、甘藷交配の説明、サツマイモを使った創作お菓子作りの実演、井戸水の硝酸性窒素分析、トラクタのけん引力計を用いた体力測定を行い、多くの方で賑わいました。また、イモ掘りや作業機実演等を実施した第2会場とを結ぶ連絡バスを運行し、とても好評でした。

今回の開催では、大半の方が午前中にお越しになり、対応に人員的限界を感じる声も聞かれ、駐車場不足など問題も生じました。開催時間を通して平準化・分散化する工夫が今後の課題となりました。



人気の高いイモ掘り体験

九州沖縄農研の動き

第2回「研究協力員の集い」を開催

地域への情報発信の拠点として今年3月建設された地域情報利用実験棟で平成16年11月6日に研究協力員の皆様など28名が参加して第2回「研究協力員の集い」が西合志地区で開催されました。

今回は「研究協力員と研究所の双方向の交流をめざして」のコンセプトのもと所長挨拶、参加者の自己紹介の後、山川理所長が技術普及の促進、技術ニーズの探索、農業関係者等と意見交換のための研究所の新たな活動として「キャラバン活動等」を紹介し、さらにお二人の研究協力員からご講演をいただきました。

まず、菊南観光ホテル総料理長の大島孝様からは「研究開発への要望・提案」と題して、所長が夜遅くまで生産現場に来て講演や話しをしてもらいたい、九州沖縄農業研究センターには「宝の山」

があり、研究協力員制度を拡充するなどして積極的な地域農業への貢献への期待が述べられました。

また、くまもと農業女性ネットワークの代表で宇土市の澤田美也子様からは、「農家経営を支える女性からの研究開発への要望」と題して、台風の影響を受けた農家経営の現状と技術開発への期待が述べられました。

その後の意見交換では、広報と地産地消の重要性、マイナー作物の農業登録、研究機関の役割など話題は多岐に渡り、予定の時間を大幅に超過して終了しました。昨年同様、九州沖縄農業研究センターの育成品種を素材にした大島総料理長の創作による試食も提供されました。

(企画調整部研究調整官 折登一隆)

国際研究情報

国際イチゴ研究の最前線

—第5回国際イチゴシンポジウムに出席して—

本シンポジウムは国際園芸学会の主催により4年ごとに開催されています。第5回は2004年9月にオーストラリア・クインズランドに34カ国の221名が参集し、148課題の研究発表や各国の種苗・資材企業による展示等が行われました。

研究発表では、①炭そ病が世界的に拡大し、従来報告のなかったイギリスが抵抗性育種を開始した一方、フロリダやオーストラリアでは耐病性品種や適期防除等の総合的対策により*C.acutatum*による果実被害を軽減、②ヨーロッパでは大型トンネル栽培(ス



ペイン、イタリア)や温室ベンチ栽培(ベルギー、オランダ)による高収量生産(10t/10a)を安定させるためプラグ苗利用システムを検討、③育種は各国とも活発で、スペインや南アメリカでは依然として‘Camarosa’(カリフォルニア大育成)が優位にあるが、オーストラリア等では自国育成品種が拡大、④DNAマーカーを利用したマッピング(イギリス、オランダ、イタリア)や遺伝子組換えによる菌類病抵抗性付与(ロシア)等に進展がみられました。

クインズランドのイチゴ生産はすべて露地で、数ha規模以上の法人経営により担われています。収穫から選果・パック詰め、出荷まですべてを人手によっており、9月初旬の収穫盛期の価格は約200円/250gとアメリカやヨーロッパと比較してかなり高い水準にありました。

国内イチゴ産業活性化はもとより国際貢献の面からも、世界的に生産量が多く研究水準も高い日本でのシンポジウム開催が内外から期待されています。

(野菜花き研究部 望月龍也)

フォトコーナー

第16回全国農業青年交換大会「農業・環境・情報展」へ出展

2004年8月26日～28日 グランメッセ熊本（熊本県益城町）

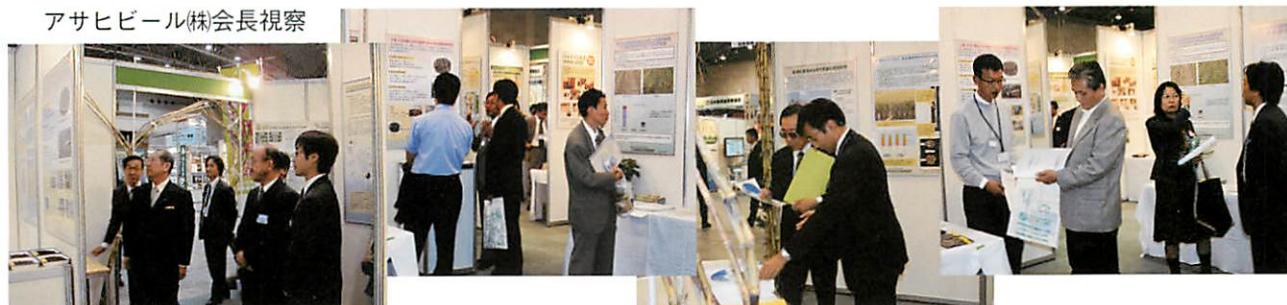


亀井農林水産大臣視察

エコ・テクノ2004「バイオマス・ニッポンin九州」へ出展

2004年10月27日～29日 西日本総合展示場新館（北九州市）

アサヒビール(株)会長視察



表彰

氏名	表彰日	表彰名	所属	功績
久保寺秀夫	H16.4.2	日本土壤肥料学会 奨励賞 (社団法人日本土 壤肥料学会)	環境資源研究部 土壌資源利用研究室	九州沖縄地域の硬化土壌の特性と管理に関する研究
小倉 昭男 北川 壽 田坂幸平* 白土 宏之 屋代 幹雄	H16.7.23	つくば奨励賞 (財団法人茨城県 科学技術振興財 団)	*水田作研究部 機械化研究室	軽量ロングマット水耕苗による革新的次世代 田植え技術の開発

お知らせ

平成16年度九州沖縄農業試験研究推進会議
第2回評価企画会議

日程：2005年2月10日（木）午後
場所：九州沖縄農業研究センター
大会議室（熊本県西合志町）

平成16年度九州沖縄農業研究センター
評価委員会

日程：2005年3月10日（木）
場所：九州沖縄農業研究センター
（熊本県西合志町）